



「台風科学」

大西晴夫 著

日本放送出版協会 1992年9月
B6版 190頁 800円

台風に関する研究と予報の現状をわかりやすく書いた好著である。久々に台風らしい(?)台風として日本に襲来し、大きな被害を与えた1991年の台風19号の話から始め、ついで台風とは何かを、熱帯気象学の初歩にたち帰って説明し、続いて台風についてのより詳しい各論(雨台風と風台風のちがひ、台風の強さ、台風情報と被害など)を、これまでの日本における台風体験と気象庁の取り組みをベースに、淡々と解説していく。後半は、最新の山岬氏によるシミュレーションまで含めた台風研究と予報の現状と今後の展望について記述されている。全体として、いかにも誠実な実務派研究者らしい著者の態度がよく表れている。

ということは、読んで面白くないという印象を与えそうだが、少なくとも、台風に対してかなりの知的好奇心を持った高校生や大学生には、十分満足して読んでもらえる啓蒙書であろう。この本が、NHKスペシャル「巨大台風の謎」で出された問題意識をもとに書かれたことも、全体をよみやすいものになっているといえる。

ところで私が興味を持ったのは、著者もあとがきで述べているように、これだけの科学啓蒙の時代にあつて、台風に関する一般啓蒙書が、1986年に出された饒村 曜「台風物語」以外にはほとんどないということである。「台風物語」は、台風に関するトピックを集めた確かに面白い本ではあるが、台風研究と予報の現状をまとめたかたちで紹介した本としては、私の知る限り、荒川秀俊著「台風—猛威への挑戦」(1958年!)、現代教養文庫)以来である。気象にも興味を持ち出した中学3年の時この本を読んだ私は、内容はよくわからぬままに、台風の進路に関する最新の理論やレーダー・航空機による大々的な観測、それに気象庁に導入されることになったIBM高速計算機への大きな期待など、自然現象の解明に立ち向かう気象学者の雄々

しさ(?)をひしひしと感じたことを覚えている。こんな古い本と比較されるのは、著者としてはなほだ迷惑であろうが、この2冊の内容を比較することにより、当時から現在に至る台風をめぐる研究と予報の歴史を、科学・技術史の一断面として捉えることができ、興味深い。

荒川の本ではまったく言及されなかった気象衛星が、今や観測の主役になっており、荒川が当面の大きな目標として語った台風の3次元構造も、ドップラー・レーダー観測や衛星風ベクトル分布などにより、ほぼかなえられた。当時知られたばかりのスパイラルバンドなどの構造とその機構も、かなりいい線で明らかになったといえる。

では、予報はどうか。計算機の導入によって、「台風進路の数値予報などの飛躍的發展が約束されている。若い日本の気象学研究者の前途には洋々たるものがある。」という一文で、荒川の本は終わっている。当時は、一般流(指向流)に台風が流されるという前提での進路予報の可能性を、まだ東大の学生だった佐々木嘉和、都田菊郎両氏が国際学会で意気揚々と発表した頃であった。現在は、スパコンによる流れ全体の予測が、数十キロの格子点間隔で行えるまでになっている。40年近い歳月をへて、進路予報の精度は、荒川が期待したように飛躍的に発展したのだろうか。この点に関し、著者の大西氏は天気予報全般に関しては、数値予報を前提としたパラダイムが完全にできあがっていることを指摘しながらも、台風の進路予報に関しては、現在でも「指向流法など使い古された手法も、捨てがたいものがある」ことを正直に認めている。

台風による被害は、この30~40年、確実に減ってきている。接近・上陸数の減少傾向もあろうが、被害を大幅に減らしてきたのは、伊勢湾、第二室戸台風などの経験を踏まえた防災対策や台風情報の流し方など、狭い意味での台風予報ではない部分の飛躍的進歩に依っていることも、この本は同時に語っている。台風を通して、「天気予報とは何か」を改めて考えさせる好著でもある。

(筑波大学 安成哲三)